

bitch volume 1

razoredge

bitch volume 1

品のない化粧と廉っぽい服装、稚さを窺わせる貌つきだが、肌の状態はよくない。会話の段落に辿り着く度に話し相手の眼を覗き込む。絶えず相手の反応を気にしていることが見透かされる。

きっと公にすることが憚られることを生業にしているのだろう。だが、心根は綺麗だ。眼が濁っていない。同席した者への気遣いを怠らないし、喋っている内容は他愛のないものだつたが、彼女の人柄と相俟つて、微笑ましささえ醸しだしていた。

だが、根が明るい圭祐は、ユカの胸裡に巣喰う昏さを感じとつていた。段落の度にユカが披露する例の態度に圭祐はじぶんが気疲れを覚えているのに近頃気づいた。

ホストとラブホからでてくるところを見掛けたと、誰からともなく、聴いた。躰を絡みつけていたという。ホストはどことはなしに醒めていて、ユカだけが有頂天といったところか。

その夜、狭い店で圭祐とユカは席が隣りあつた。

一頻り世間話をして、圭祐は、例の話をおもいだした。

「ホスト、通つてんのか？」

「え、誰がですか？」

ユカは如何にも甘ったるそうなカクテルに刺さつたストローを吸つていた。

「お前だよ」

「どうして識つてるんですか？」
眼を丸くする。

「風の噂さ」

「たまにしか行かないから通つてるつて云うのかな？」

目線を宙に泳がせながら暢気に応える。

「ハマるなよ」

「気をつけます」

言外は汲みとられなかつたとユカの態度で判り、圭祐の貌に索然たるもののが過ぎつたが、ユカはそれを見落とした。

携帯が鳴る。着信音はこれまた廉っぽい泡沫のようなJポップだ。ユカは慌てて席を外して店外へでていった。

圭祐は、ユカが席を外すと、大きく息をついた。

やはり、苦手だ。

「ユカ、きょうノルマやばいんだけど、これからででこれない？」

「行つてあげたいけど、おカネがないから」「それは心配しなくつていいよ。あるときにお預つてくれたらしいし。じゃ、決まりね」

「ちよつと……」

コージはさつきと通話を打ち切つてしまつた。

「もうっ」

頬を膨らませつつも、ユカは貌を綻ばせていた。

「お会計お願ひします」

ストラップを鳴らしながら店内に戻つてくるなり、ユカは店主に告げた。

「それじや、圭祐さん、お先です
「あばよ」

圭祐は軽く手を挙げて応えた。

煌びやかな電飾が人目を惹く。だが、大抵の者はその素性を識り、そつけなく見切る。うつすらと失笑を浮かべる者もいる。ナルシシズムを競うかのように写真に収まつた青年はいずれもヘアメイクを施し澄ました表情をしている。

足を踏み入れると、そこは、ゴールドが氾濫していた。装飾という装飾にゴールドが用いられている。豪奢なシャンデリアの供給する過剰な光量を総鏡張りのストラクチャが増幅させている。贅を尽くしているが、品格というものがごつそりと欠如していた。

それぞれのボックスで着飾つた男がゲストである女を接客している。客層は様々

だ。水商売と思しき客もいれば、総合職・経営者風の客もいた。OLらしき客もいる。男

たちは、話し相手になり、グラスが減れば継ぎ足し、タバコを咥えればすかさず火を差す。一方、客の肩に手を回し、鷹揚に構えている者もいる。

フロアの一画に、ユカがいた。両手で大事そうにグラスを持つている。隣にホストがついている。ホストはコーディといつた。

「ユカちゃん、今夜は呑もうよ」

逸つた口調だ。

「呑んでるよ」

興が乗っているらしいコーディに気後れしながらもユカは丁寧な受け答えをした。

「うん。それはそうだけど、今夜はガンガン行こうよ？」

二十代半ばといったところか。派手な髪型だ。流した髪から垣間見える貌は不細工ではないが端正とも云えない。

「どうして？」

ユカが訝る。

「それは……」

勿体つけてから、コーディは言を継いだ。

「ボクちゃん、愛しいユカちゃんが大好きだから」

見え透いているが、ユカは満更でもなさ

そうに笑んだ。

「私なんかにそんなこと云ってくれるのコーディだけだよ？」

「ウソ？ そんなに可愛いのに？」

如何にも意外そうな表情をするコーディ。揺られていくうちに、ユカの眼が爛々たる光を帶びてくる。

「可愛い？ ウソでしょう？ 私みたいな子が可愛いなんて……」
俄に真顔になるコーディ。

「可愛いよ」

ユカは動搖した。コーディはすかさず間合いを詰めた。

ユカの唇を奪った。ユカは抗つた。だ

が、それは抗ったふりをしただけだった。

コーディは、ユカの躰からすっかり力が抜け
るのを待つて、離れた。

余韻に浸っているユカにコーディが持ちかけ
る。

「お酒、なくなつちやつたね。ボトル入れよ
うか？」

「え、でも……」

「何？」

コーディは飄然と云い放つた。ユカが口を挟
んだのをその一言によつて一蹴した。

「呑もうよ。今夜は。ユカと呑みたいんだ。
ダメ？」

コーディは小首を傾げてまでみせた。ユカは
赤らめた貌のまま俯いてかぶりを振つた。
コーディとユカを眺めている連中がいた。待
機状態のホストだ。

「うわっ、チューしやがつた」

「よくやるよ」

「ある意味プロつすよね？ あんな雑魚ばつ

か相手にして数こなして稼いじやうんだか

らさ

「セコいよな」

「センパイ、いつも役満ばっかり狙うから
麻雀負けちやうんですよ？」

「うるせえよ。七対子野郎」

「他に役識らないんですよ」

横長のシンクに幾つかの蛇口が横に列ん
でいる。眼の高さに鏡が張りつけてある。
シンクに沿つて横に列んで、着飾つた女
たちが歯磨きをしている。女たちの衣裳は
いずれも派手で露出が多くて廉っぽかつ
た。

「ハツピータイムだけ忙しいなんてね」

年増の愚痴に追従の笑みで応えたのはユ
カだった。

「やつてられない」

瘦せぎすの女が年増に相槌を打つ。

それに対してもユカは愛想笑いで応え

た。

「やることは一緒だつてのにね」

痩せぎすの女は口を濯ぐと、ゴミ箱の裡に積まれた歯ブラシの山に、手にしていた歯ブラシを投げ込んだ。

着替えを済ませたユカが灯りの消えた店頭に現れた。

携帯電話片手に帰路を辿つていると着信。

コージだ。急いで通信状態にする。

「もしもし」

「いま大丈夫？」

ユカは突つ懼貪さに気づかないふりをした。

「うん」

「あのさ、あしたまでにツケ持つてきてよ」「もうすこし待つてくれる？ 飼い猫が具合悪くなっちゃっておカネがいるの」

「それはお前の事情じやん？」

「もつと客とつてさつさと返すもの返して

ユカは口籠もる。

よ

「ごめんなさい」

「『ごめんなさい』じゃなくて、あしたまでに支払ってくれなかつたら遅延損害賠償もしてもらうからね」

ユカが応えようとしたが云わせも果てず通話は打ち切られた。

室。

一〇台ほどのスロットの筐体が並べられていて、数名がスロットに興じている。

筐体の音声出力はミュートされている。室内にBGMがあるわけでもない。黙々と三枚のメダルを投じてはレバーを叩く手順を繰り返すプレイヤーたち。

コージもスロットに張りついていた。

貌は蒼白で眼つきは逼迫していて空調は適温にも拘わらず汗ばんでいる。抽選が外

れ、コーディの手許のメダルは最後の三枚となつた。メダルを流し込み、レバーを叩く。演出が発生した。

コーディが反応する。

しかし、演出はガセだった。

室の隅から看守のようにプレイヤーたちに眼を配る者がいた。

コーディが看守の方に振り向き、看守はコーディの目配せに応じた。

コーディに近づいてきた看守はクリップボードをコーディに差しだした。コーディはクリップボードをひつたくつて署名欄をさがした。クリップボードにセットされた書類には借用書と題されていた。

看守は返ってきたクリップボードを検めてからメダルの筒をコーディに渡した。

明け方まで呑んでいた。階段から降りてきた圭祐はのろのろと歩きはじめた。

バラツク小屋が軒を連ねるその界隈はそこはかとない発酵が放つ匂いが漂つている。

バラツク小屋の間を縫う路地から靖国通りとラブホテル街を結ぶ小径へ抜けた。

静謐をほぼ真横から朝の澄んだ陽光が射貫く。

一組のカツプルがホテルからでてきた。ホストと、おそらくは客。

安酒で一夜をやり過ごした圭祐は舌打ちするよう見切りをつけた。見切りをつけたから、女がユカだと気づいた。ユカはホストに気取られないように目配せをくれた。

圭祐はカツプルを背に苦笑してみせた。

肉塊が位置エネルギーを消費する抜けの悪い物音がしてポリバケツが鳴いた。人目を避けたスリットの劣化した舗装の

上に転倒したのはコーディは髪を掴まれ、面を上げさせられた。

「誰が借金してまで遊んでくださいってお願ひしましたか？」

看守だつた。

「早くしないと利子だつて馬鹿になりませんよ？」

蹲つたままのコーディを置いて看守たちは立ち去つた。

立ち去り際、看守はこう付け加えた。

「逃げようつたつて無駄ですよ。見張つていますからね」

圭祐が呑んでいるとユカが現れた。ユカは非番だという。

予定でもあるのか、頻りにモバイル機器を気にしている。

「この間はごめんね」

ユカが上目遣いに謝つてくる。

一拍遅れて、圭祐は心当たりに気づいた。

「別に

笑つて濁す。

ユカがこれ見よがしにため息をついてみせた。

「どうした？」

「あした、誕生日なんです」

「そりやおめでとう」

「ありがとうございます」

破顔して、ややあって、貌が翳る。

「カレ予定訊いてくれないんです。もしかして忘れられちゃつてるのかな」

「さあな」

圭祐がグラスを口に運んで間をとつたとき、ユカのモバイル機器が信号を受信した。

気が逸っているのがモバイル機器の扱いからみてとれる。

緊張した面持ちでメッセージを確認すると、その貌がぱっと綻んだ。

「さっさと行けよ。今日は俺の奢りだ」

ユカは喜んで礼を告げそそくさと店を辞した。

落ちあうと、ホテルに連れて行かれた。異を唱えようとしてやめた。明日も休みを貰っている。時間はたっぷりある。

チェック・インを済ませ、室へ向かう。一緒に室に入ろうとしたとき、コージが立ち止まつた。

「タバコ買い忘れた」

「私のあげるよ？」

「メンソールダメなんだよ。先入つてて」

コージはさっさとエレベーターに戻つて

しまった。

室に入つて、ユカは愕いた。

一〇人程度の男たちが待ち構えていた。

圭祐はユカと逢うことのある例の店で呑んでいた。

「顔見知りと席が隣りあつた。

「圭祐、ユカちやん識つてるよな？　あの子、自殺したって」
弾かれたような反応を示す圭祐。
「風の噂だけど、ホストに騙されて筋の悪いAV制作会社に売られて輪姦されちゃつたらしい」

その夜、歌舞伎町は雨だつた。

一つの傘の下に、カツプル。

揺れながら遠ざかつていこうとする傘に忍び寄る。

傘を差す左手は男のもの。

カツプルの姿を逆さになつたボトルが遮るが早いか、男の右側で破裂音がして、カツプルは歩を止めた。

粉々になつたボトルから、赤。

一気に間を詰めた。

男の無防備な右脇腹に拳を撃ち込んだ。

溜まらず膝を折つたのはコージだつた。

女の方は、圭祐の様子を窺つてから、逃げだした。

貌を蹴飛ばし、胸座を掴み、二・三発ジヤブを見舞う。

街灯が浮かびあがらせている一対の影絵は雨に引っ搔かれてノイズが載つてゐるかのようだつた。

墓場に似つかわしくない普段着の圭祐が墓前に佇んでいる。

「ドンペリとはいかねえけどな」

持参したワインを墓標に浴びせる。

一頻りして、引き返す。

両切り煙草に火を点ける。

天空を仰ぐ。

歌舞伎町辺りから眺めるそれと違つて腐つていな、子供の頃眺めていた天空が際限なく拡がっていた。